## シーワールドのアニマル達

### ●長生きNo.1 アマゾンカワイルカ

シーワールドの長生きNo.1は、アマゾンカワイルカのオス「ボコ」です。年令は19才以上で、大きさは、体長2.17m、体重約130㎏あります。昭和44年11月、まだシーワールドが開館する前から当館にやって来ました。当時は、プレハブの仮飼育小屋の中に小さなプールを作り、暖房用のストーブと、ボイラーで気温や水温を保って、日本の冬をすごしました。昭和45年10月にシーワールドが開館して、現在のカワイルカプールにオス・メス2頭で移って来て、途中でメスが死亡したものの、ボコは元気にすごしています。

海のイルカを見なれている私たちは、アマゾンカワイルカを飼うようになって、同じイルカでもこんなに違いがあるのかと、びっくりすることがたくさんありました。まず、吻が大変細長くて、おまけに、そこに短い毛があることです。普通海のイルカには、生まれた時には、短い毛がありますが、すぐなくなってしまうのに、大きくなっても生えているのです。この特徴は、カワイルカの仲間が、原始的なイルカであるしょうこだそうです。それにまた、体をくるりと曲げて、尾ビレを噛むこともできるほど、体が柔軟なことです。尾ビレの先に咬み傷が有るので、ふしぎでしかたありませんでしたが、ある時、ボコが尾ビレを噛んで遊んでいるのを見つけて、この傷の原因がわかりました。

皆さんも、一度海のイルカと、このめずらしいアマゾンカワイルカをくらべて見てはいかがですか。 (星野)

▲アマゾンカワイルカ *Inia geoffrensis*

### ●干潟の道化師、ムツゴロウ

ムツゴロウは体長20㎝程のハゼ科の魚で、名前はよく知られていますが、飼育が難しく水族館ではあまり見ることができない魚でした。日本では有明海と八代湾の干潟にだけ生息し、陸上でも呼吸することができ、体の左右にある胸びれを同時に動かして泥の上を歩き回る珍しい習性をもつ干潟の道化師です。当館では、このたび長崎水族館からムツゴロウを空輸してもらうことになり準備にとりかかりました。ムツゴロウの受け入れは、生息に適している有明海の泥をとりよせたり、特別な水そうを作製するなどの環境作りから始められました。また河口付近に生息するので、飼育水は海水と淡水とを1対1の割合で混ぜたものを使用しました。そして6月下旬にはムツゴロウ20尾が無事到着し、予備水そうで飼育を始めました。ふだんは泥の上にはえている珪そうを食べているので、その代用としてクロレラを冷凍アミやエビにまぶして与えましたが神経質なムツゴロウはなかなか食べようとはせず、次第にやせ細ってしまい、心配させました。しかし日数がたつにしたがって、鴨川の環境にも少しずつ慣れてきて、夜に餌を食べるようになりました。そして3ヶ月間の苦心の飼育の結果、体も太ってきて、ようやく10月1日より皆様にお見せすることができる様になりました。今は特設水そう(2m×1m×30㎝)の中で、トビハゼやシオマネキなどの同じ干潟の仲間達と一緒に仲良く暮しています。 (森田)

▲ムツゴロウ *Boleophthalmus pectinirostris*

### 表紙説明

世界最大のカニとして有名なタカアシガニは、銚子から九州にかけての太平洋岸に住み、雄はハサミを広げると3mを超える大きさにまで成長します。この写真は、「鴨川シーワールド写真コンクール」で入選された石渡松之助さんの作品です。 (祖一)


さかまた No.18 (禁無断転載)

編集・発行 鴨川シーワールド

〒296 千葉県鴨川市東町1464-18

☎ 04709 (2) 2121

発行日 昭和56年12月


# さかまた

鴨川シーワールド NO. 18

# カツオ・マグロ類の飼育に挑戦！

カツオやマグロなどの魚は一般の家庭では良く知られた魚の一つです。しかし、水族館では採集や飼育の方法がむずかしく、ほとんど見ることができません。そこで、その生態を見てもらおうと、この度、飼育に挑戦してみました。準備はカツオやマグロの若令魚が餌を求めて黒潮にのり房総沖へ回遊してくる8月中旬からはじめました。この項のカツオ、マグロ類の大きさは体長25㎝前後、

▲鴨川沖での釣り採集

体重約200ｇで最も飼育しやすいサイズです。採集方法や輸送方法も決まり、魚の一番釣れている朝夕の２回に分け、小船に乗船して鴨川の湾内で採集を実施しました。成果は主にクロマグロ、ヒラソウダ、マルソウダ、スマでしたが、その他にシイラやマサバ、ハガツオなども釣れました。しかし、目的のカツオ、マグロ類が釣れても釣針が眼にかかっていたり、口が切れてしまったり、船のカメ（水そう）にぶつかったり、用意していった水そうの中で体が傷ついてしまったりして、多くの魚が飼育できる状態ではありませんでした。

▲トラックから水そうへ

そのため、その後、道具に改良や工夫をこらし、ようやく横６ｍ縦4.6ｍ水深2.4ｍの水そう、通称マスコットコーナーに搬入し、展示する事ができました。その結果は表の通りです。ところが、カ

▲展示されたヒラソウダの群れ *Auxis thazard*

ツオ、マグロ類は広い海を活発に泳ぎまわっている魚達ですので、狭い水そうに入れられると落ち付かず物音などにびっくりして壁に激突したり、水そうから飛びだしたりして次々と死んでしまいました。そこで、水そうの上にフェンスを張ったり、照明にも色々と工夫をこらした結果、次第に落ち付きをとりもどし、アジやイカの切身を食べる様になりました。食事の時には泳ぐスピードがいっそう速くなり、飛行機が空中戦でもしているかのような感じで見事なものです。回遊魚の体は典型的な紡錘形で尾びれが大きく、付け根が細く高速で泳ぐ時には背びれを折りたたんで泳ぎます。そのため他の魚達に比べると急停止や小回りがうまくできませんし、夜でもこれらの魚は常に泳ぎまわっていて決して静止する事はありません。ヒラソウダは成長しても40㎝、マルソウダは35㎝程の小型のカツオです。スマは成長すると1ｍ程になり、地方名はワタナベとかヤイトとも呼ばれ胸びれの下にある数個の黒点が特徴ですが泳いでいる時には消えていてほとんど見ることができません。クロマグロはホンマグロとかメジマグロとも呼ばれ、成長すると体長３ｍにもなりマグロの中では最大の魚で「マグロの王様」とも呼ばれています。

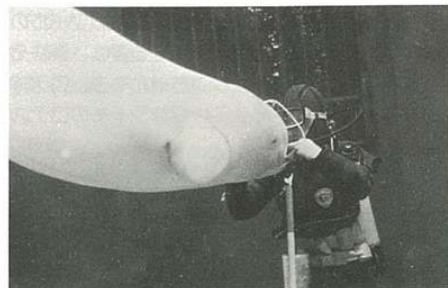
今は、まだ仔供のクロマグロもヒラソウダとともに仲よく元気に泳ぎまわり日々成長を続けているので、どのくらい大きく成長するのか大変楽しみにしています。（平塚）

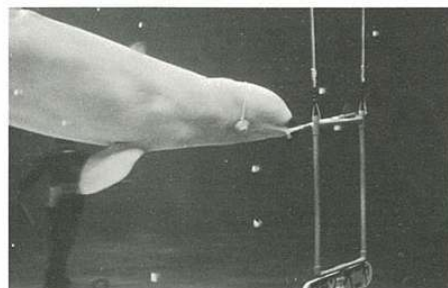
**カツオ・マグロ類の月別飼育結果**　10月31日現在

| 月 | クロマグロ |  |  | ヒラソウダ |  |  | マルソウダ |  |  | ス　マ |  |  |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
|  | 搬入数 | 死亡数 | 生存数 | 搬入数 | 死亡数 | 生存数 | 搬入数 | 死亡数 | 生存数 | 搬入数 | 死亡数 | 生存数 |
| 8 | 22 | 8 | 14 | 3 | 1 | 2 | — | — | — | — | — | — |
| 9 | — | 10 | 4 | 14 | 5 | 11 | 2 | 1 | 1 | 2 | 1 | 1 |
| 10 | 1 | 2 | 3 | 14 | 5 | 20 | 11 | 9 | 3 | 2 | 3 | — |
| 計 | 23 | 20 | 3 | 31 | 11 | 20 | 13 | 10 | 3 | 4 | 4 | — |



# 人間の言葉を憶えたベルーガ

昭和51年８月にカナダのチャーチル河で捕獲された３頭のベルーガは、９月にシーワールドにやって来てから名前を「ポール」「ローラ」「チッチ」と名付けられ、到着して１ヵ月後の10月からマリンシアターで、ダイバーと共に水中ショーを始めました。

▲目かくしをしてもらうポール君

昭和55年６月からは「イルカのもつ超能力」をショーをとおして楽しく理解してもらおうという目的で、幾かのショーを行っています。その１つとして「エコーロケーション」をとりあげ御覧いただいております。この「エコーロケーション」とは、イルカが音を使って物の形や質、位置を判別する能力のことをいいます。現在のショーでは、同形、同色のステンレスとベニヤの板をプール内におき、目かくしをしたオスのポール君が、ダイバーの示す板と同じものを探し出すという事を行っています。ポール君は、目かくしをしていても全く迷うことなく２種類の板の所まで泳いでゆき、確実にダイバーが示した板と同じものを、探してくれています。

▲目かくしをしてステンレスの板にタッチするポール君

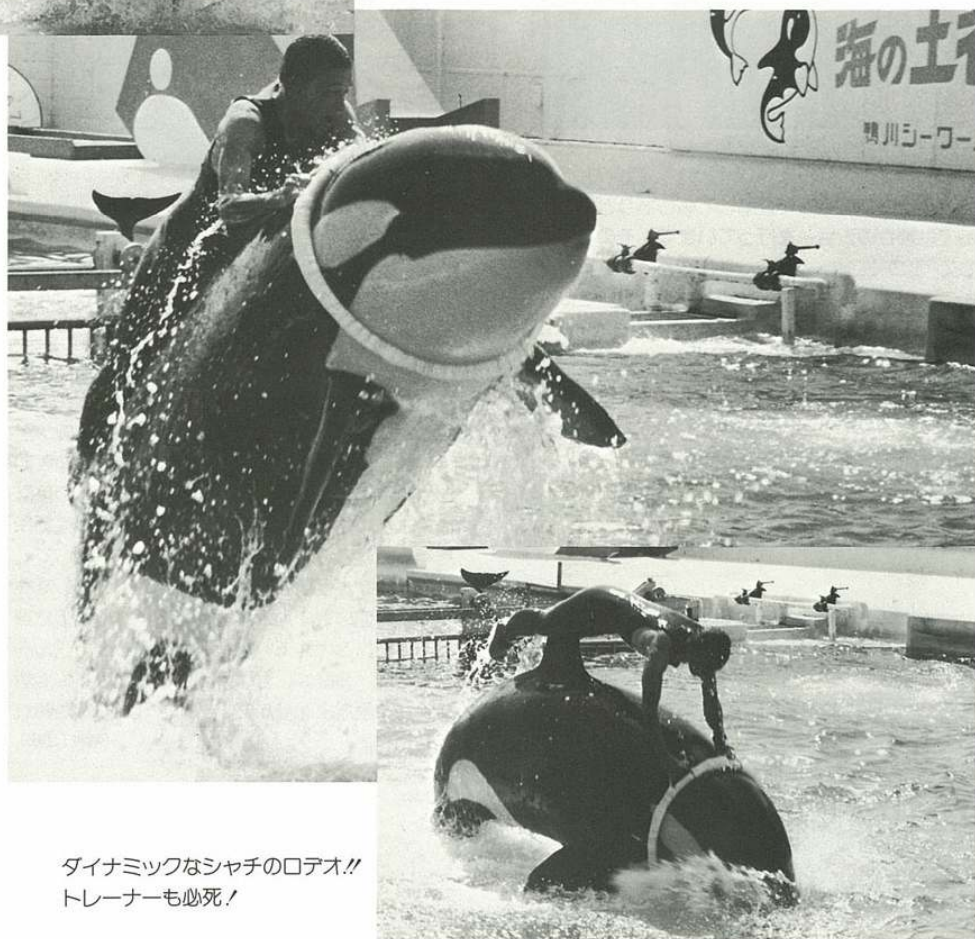
この「エコーロケーション」の能力以外に、もう１つ、イルカが人間の言葉を記憶できるかどうかのテストも行っています。今ではポール君は、水中スピーカーから流れてくる「ダンス」「ボール」「コンニチワ」という言葉を聞き分け、体を回転させダンスを踊ったり、プール内のボールをダイバーまで運んで来たり、首を大きく振って、あいさつをしたりするようになりました。ポール君は、この３つの人間語を、記憶したわけですが、初めの頃は、ちょっとした言葉のいい回しの違いで、迷ってしまったり、まるっきりわからなかったりして、とてもイラ立つことがありました。そのような時には、適当な動作をして、ごまかそうとしたりします。ポール君にとって、全くイルカの言葉とは違った人間の言葉を聞き分けるという事は、大変な努力が必要であったことと思いますが、その結果、今年の夏には、水槽の外からのお客様の言葉にも正しく動作をするまでになり、100％近い正解率をしめしてくれています。今後は言葉の数を、もっと増してゆき、どの位の数の人間語を憶えてくれるものか調べてみたいと考えています。そのうちに、ベルーガ君達は「今度は、君達人間が、僕達のイルカ語を覚える番だよ。」なんて、言いはじめるかも知れませんね！（毛利・山田）

▲お姉さんの言葉を聞いているポール君

トピックス

# シャチのロデオ初公開！

当館では、３年前からクジラのロデオを公開し、お客様の人気を集めていましたが、クジラのロデオに続き、今年の夏には、日本で初めて、シャチのロデオが登場し、お客様を驚きの世界へ巻き込みました。このシャチ君は、昨年２月にアイスランドからシーワールドにやって来た、オスのキング君（年令４才・体長４ｍ・体重１トン）です。

海のギャングともいわれ、大変気の荒い性格をもっているシャチ君、調教にはいろいろな苦労もありましたが、短期間でこの荒技を覚えてくれました。トレーナーを背中に乗せ、水深3.5ｍのプールの底から、一挙に空中に向って２ｍ以上もジャンプする姿は、豪快そのものです。キング君と共にやって来たカレンちゃんも今、ロデオの特訓中で、来年の夏には、２頭のダイナミックなシャチのロデオを見せてくれるものと期待しています。（佐伯）

ダイナミックなシャチのロデオ!!
トレーナーも必死！

# アシカの繁殖に成功！

６月14日、仲良し広場のプールで、カリフォルニアアシカの赤ちゃんが元気に生まれ、お乳を呑んで、すくすくと成長しています。

シーワールドでのアシカの出産例は、これで８回目になりますが、今までは早産や死産で、いづれも短命に終っていたものの、今回は順調で、アザラシ、ペンギン、イルカに次いでアシカの繁殖にも成功しました。

アシカは、毎年５～７月頃交尾期をむかえ、その後11～12ヶ月ほどで出産します。

このカリフォルニアアシカは、世界的な野生動物の保護運動のため、アメリカからの輸入が禁止されています。そのため、全国の動物園や水族館では、繁殖に力を入れている動物の一つになっています。（高橋幸）

▲体重を測っている仔アシカ。
初めは６㎏たらずでしたが、今では14㎏もあります。（生後１ヶ月目）

▲母アシカ（サンタ11才）のお乳を呑んでいる仔アシカ。お乳は、５分から15分ぐらい呑んでいます。乳頭は４つあります。（生後１週間目）

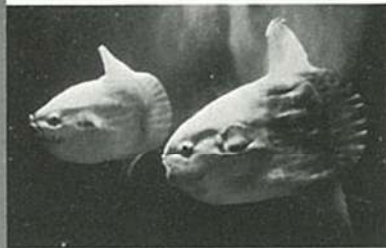
カリフォルニアアシカ

◀展示プールの親仔アシカ
今では、小魚もくわえて遊んでいます。（生後４ヶ月目）

## ジュニアトレーナー開校

毎年夏休みに行なわれている、小学生対象の一日飼育係「サマースクール」とは別に、一日調教師「ジュニアトレーナー」を８月４日から６日までの３日間開校しました。イルカの調教を基本から体験してもらおうという目的で、小学校高学年を対象として、一日５名の募集を行ないました。午前中は、イルカの行動や能力について講義を行ない、午後からは、餌作り、調教用具作りをはじめ、笛の吹き方から合図の出し方と、基本をみっちり仕込まれたチビッ子たちは、楽しいというより真剣そのものでした。最後には、イルカに対し一人一人がトレーナーとなって、ウルトラCのジャンプをさせたり、イルカに乗ってプールを回ったりできるようになりました。今後も少人数の募集ですが、充実した内容で続けてゆく予定です。（清水）

## 971日の飼育世界記録を残したマンボウ

飼育世界記録を大幅に更新中だった２尾のマンボウが、飼育日数1,000日を目の前にした去る８月９日（ユーラン、飼育日数965日）と８月15日（ノンキー、飼育日数971日）に相次いで死亡しました。「ユーラン」と「ノンキー」の死は、ただちにテレビや新聞などを通じて報道され、全国のマンボウファンから、たくさんの悲しみや励ましの手紙をいただきました。この紙面を通してお礼申し上げます。私たちにとってマンボウの死は、悲しい出来事でしたが、それ以上に３年近くも生き続け、その間に飼育方法や知られていなかった多くの資料を残してくれたことに感謝しています。マンボウは、毎年冬から春にかけて鴨川沖にやって来ますので、このユーモラスな体で愛きょうを振りまくマンボウの姿を一日でも早くお目にかけたいと思っています。（森）

## パノリウムの改装

当館のパノリウムは水の一生をテーマに滝からサンゴ礁までの様子を水の流れにそって展示しているパノラマ形式の水そうですが、10月にこの一部を改装しました。今までの港と磯のパノラマだったところを、この改装では鴨川を中心にした天津小湊から太海までの海から見たパノラマとしました。精巧に作られた鴨川シーワールドや鉄道などのミニチュア類や山々は、まるで飛行機から見ている様です。展示している生物も鴨川付近の磯で見られるものがほとんどで、キスやハオコゼやサンゴイソギンチャクなど40種1,500点にもなります。水面上の景色と水面下の生物を合わせて見て、鴨川付近の海の中を想像していただければ興味深いものとなることでしょう。（小坂）

## 鴨川シーワールド写真コンクール

夏の園内催し物の一つとして、７月26日より８月23日まで、写真コンクールを行ないました。特に８月２日には、３名のモデル嬢も登場し、シャチのキスを受けたり、イルカやオキゴンドウに乗ってプールを一周するなどの名場面が続出しました。参加したカメラマンは、約70名でイルカプールのまわりに集まりさかんにシャッターを押していましたが、モデルがクジラの背中に乗ってうまくプールを一周した時などには、シャッターを押すのも忘れて拍手がわきおこるほどでした。応募された作品は145点にのぼり審査の結果「推選」には原通利氏、その他「特選」１名、「準特選」２名、「入選」10名、「特別賞」10名、「ファミリー賞」10名が選ばれました。表彰式は10月４日に当館で行なわれ、入賞作品34点は、中央ホールに展示されました。（金鋼）